



これまでの感染状況から、高齢者や糖尿病・呼吸器疾患・透析患者、発生が増えています。また、病床利用率や重症患者数は高水準で、いまだ予断の許されない状況にあります。

全世代が向き合うべき感染症「コロナは身近に潜んでいる」

医療体制ひっ迫目前まで悪化予断が許されない状況続く

世界を一変させた新型コロナウイルスの発生から約1年経過した今、日本の状況は、福岡県を含めた10都道府県の新型コロナ患者向け病床利用率が、政

最前線

コロナの

新型コロナウイルス

田川地域の医療の要・田川医師会に聞く！



この記事の
担当 Dr.
岡部浩司 副会長
1955年生まれ。久留米大学医学部を卒業後、父が開業した「岡部内科循環器内科(☎42-1349)」(田川市)を継承し、患者さんと家族の立場に立った医療を提供。平成28年に田川医師会・副会長に就任。

ワクチン接種を目前に、第3波が猛威を振るった新型コロナ感染症。二度目の緊急事態宣言が延長され、感染症との闘いに終わりが見えない。現状・対策・ワクチンの観点から、新型コロナの最前線をお伝えします。



府の対策分科会が示すステージ4の目安に到達するほど拡大が進み、医療体制がひっ迫する寸前の状況にまで至っています。全国的には、第3波の流行最大時に比べ、感染者数も減ってきていますが、田川地区では減少傾向は見られずむしろクラスターの

免疫抑制剤や抗がん剤を使用しているかたは、重症化リスクが高いことが判明しています。その中でも特に高齢者は、基礎体力が低いことに加え、自覚症状が現れにくい傾向です。無症状や軽症であっても感染後10日前後で急に悪化する例も見られ、受診すると既に重篤な状態である場合が多く、そのまま死亡につながっていることも高齢者の死亡率が高い一因として挙げられます。

だからといって若い人は、新型コロナを心配しなくてもいいということではありません。実際に、新型コロナの回復後も倦怠感や脱毛、味覚・嗅覚障害などの後遺症に苦しむ人も多く、新型コロナは重症化リスクの高い人だけの問題ではなく、すべての人が向き合わなければならない重大な問題なのです。

感染拡大は、福岡市などだけでなく、筑豊地域でも徐々に感染者数を伸ばし、病院や施設では、大規模クラスターも発生しています。仮に第3波が落ち着いても、第4波が発生するかもしれません。「感染者数が減ってきたから、もう大丈夫」と思うのではなく、常に「コロナは身近に潜んでいる」という心構えで、徹底した感染症対策を実施し続けることが求められています。

● 福岡県新型コロナ特設サイト

福岡県内で確認された新型コロナ感染者数やそれらを地域別・男女別・年代別に分けた情報などを公開しています。田川市郡の状況もこちらから確認できます。



▶ 田川医師会とは

田川医師会は、田川8市町村で医療、健康保持・増進、予防、健康相談、その他工場等従業員の健康管理・安全、環境保全など多岐にわたって行政と連携しながら活動し、地域医療に貢献する法人。現在は、田川市郡の医師など183人が会員として在籍している。また、田川医師会の事務所がある田川メディカルセンター(田川市大字伊田2735-23)には、田川地区急患センターを設置し、平日(19～21時▶内科)、土曜(18時～23時、小児科、内科)、日曜・休日(9時～23時▶小児科、内科、外科)で救急医療を提供している。新型コロナワクチンの集団接種も田川医師会の全面協力で行われる予定。

→ 今回の特集にご協力いただいた田川医師会の(左から)荒木久昭会長、岡部浩司副会長、桑野和則専務理事。田川メディカルセンター前で。